

中村武羅夫

島村抱月氏



島村抱月氏



余の島村抱月氏に最初お目にかかったのは今年の春四月、暖かな日であつたと記憶する。潜りを入れて先ず玄関に向うと、左側に木曜日に非ざれば面会謝絶の掲示（？）がしてある。有さすが繋は洋行帰りだけあつて堂々たるものだ、先ず会わない中から感服する。

案内を乞うと十五六の小僧が取次に出た。刺を通ずると、早速二階の一室に通されて、少時其所に待つ。隣りの室は書齋と見える。誰れか先客があつて話声がして居

た。待つ間を渋茶を啜りながら先ず室を見る。八畳で木柱は妙に凝つてあるようだが、借家と見えて惜しいことには建方が何所か粗雑である、襖や畳の上物でないのも目に立った。何所を訪問しても知名の文士が大抵借家住いである。一角の文士になったら、立派な家の一軒ぐらい建てられぬものかなどと思つて居る中に、先の客は帰ると見えて、暇を告げて挨拶が交される。抱月氏は客を送り出して置いて、旋て又二階に上つて来られた。今度は余の面会する番だなど思つて、少し崩れて居た膝を正して固くなつて居ると、書斎と障ての襖を開けて入つて

来られたのは抱月氏である。逆さになるようにお辞儀を  
すると、氏は軽く礼を返して、此方にと言われる。即ち  
書斎に通された。書斎は極めて明るい。東と南は一面の  
硝子張りになって、室の造りは日本室だが、椅子テエブ  
ルなど置いて洋風に使ってある。室には本が面面にごた  
ごたと置いてある。それが皆余などには題目だけしか読  
めない。赤や青のクロースに針金を曲けたような金の横  
文字で、素晴らしいものである。中には外国の雑誌らし  
いものもあった。余に分つたのは早稲田文学の合本ぐら  
いのもの。

小さな丸い卓を中に抱月氏と相對した。背の高い人である。色の黒い、眼の窪んだ、額の広いゆっくりと態度の落付いた、こせつかない真に學者らしい人だ。有繫は洋行迄しただけの貫目はあると又茲でも感心するより外なかつた。物言いがゆつたりとして、如何にも落付いて居る。軽佻な所がない。黄色っぽい細い縞の紬の袴を着て居られた。風采はさして大したものではない——と云うより寧ろ質素な方であるが、抱月氏自身の貫目は風采の如何に依つて上下しない。接して見て何となく尊崇の念を起さずには居られない。声は余り高くない。極く静か



で、言葉が激するとか熱するとか云うことがない。何時も同じ調子で、一語から一語の間が必ず何秒と定つて居る。緩漫になったり、急迫することはない。そして、話が首尾透徹して理解し易い。それを後藤宙外氏と比較して見る。人物の貫目に於ても、其態度に於ても、実に雲泥の差である。即ち抱月氏は宙外氏に比して偉らく、どっしりとした重みもあれば、人物に貫目もある。宙外氏は抱月氏に比して偉くなく、どっしりとした重味もなく、人物に貫目もないのである。抱月氏宙外氏共に早稲田出の人である。余は一体感じの上から、余り早稲田大

学を好まぬが、然し、あの殺風景な、ペンキ塗りの学校から、吾が島村抱月氏の如き人物が生れたかと思うと頼もしい。

抱月氏は学者であると云う。美○学○が○う○ま○い○と云う。成程学者らしい様子をして居る。美○学○が○う○ま○い○ら○し○い○顔○を○して居る。が、要するにそんなことは何うでも好い。余は抱月氏の人物が気に入った。恐らく抱月氏は傘を持たずに途中で白雨に逢つて、縦し其冠つて居る帽子が一個しかないシルクハット、其着て居る洋服が一枚しかない何とやら服であつても、決して走つたり何かする人では

あるまい、何所までも落付いた何所までも態度を重んずる人と信ずる。

一見して抱月氏は極めて常識の明らかな人と云うことが分る。欠陥のない円満な人と云うことが分る。何所までも学者らしい学者だ。



日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館